怪しいドアの向こう

ドアの向こうは妙に怪しい。

夜９時の静かな夜の話である。

だけど明日の朝は青空になるような・・・・・爽やかな匂いがする。

とんとんとん

ノックが聞こえた。

ドアスコープから右手を横に添えこっそり覗くと一人のやけに寒気のする氷のバケツを抱えた大きな男が一人立っていた。

決して開けてはいけない・・・・・・わけではない・・・・・わけでもない。

やっぱり開けてはならない。

俺はふらふらと戻り、布団の上で眠りについた。

体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました。